



CUE'S Amateur Big Game Report

第19期 球聖戦・東西決定戦／球聖位決定戦



日本一の仲間と共に。 埼玉・喜島安広が劇勝！

—— 村上泰辰を下し、第19期球聖位を奪取！ ——

数あるアマチュア大会の中でも、一際の人気を集める珠玉のタイトル『球聖戦』。

平成4年に始まったこの大会は今年で19期を迎えた。歴代の球聖位に名を刻む名選手に敬意を抱き、その栄光を目指して挑むプレイヤー達。たった一つの椅子を巡って約3ヶ月に及ぶ数多くのドラマを演じ、強靱な精神力でライバル達をなぎ倒し、最後のステージに立った2名と、1年間その席で待ち続けた現球聖。

そんな3人のヒーローの軌跡をここに。

取材・文／高田明



第19期 球聖戦 東西決定戦

日程：4月24日(土)
場所：大阪・高井田ビリヤード
試合方式：ナインボール3セット先取
(1セット7ゲーム)

東日本代表 喜島安広 (埼玉)

1983年1月7日生/ビリヤード歴：11年/所属：SION/プレーキユー：オリビエ、ブレイクキユー：シヨーン+DI シャフト



3 - 1

西日本代表 佐保功一 (大阪)

1985年9月30日生/ビリヤード歴：8年/所属：プールステーション/プレーキユー：メッツ、ブレイクキユー：プレデター BK



summary of the game

両選手とも硬い表情のスタートに。セットカウント1-1のイーブンで迎えた勝負所の第3セットも拮抗した展開となり4-4で折り返すも、ここから喜島が3連取して2-1で王手。第4セットの第4ゲームで佐保が⑧カットを決めるもスクラッチを喫し、喜島がマスワリで加點して4-1に。その後も揃って攻撃的かつスピーディなプレーを披露するが、第9ゲームの④で喜島がファインショットから取り切ると最後までマスワリで締めくくった。



第1セット	喜島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
喜島 1 - 0 佐保	佐保	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
第2セット	喜島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
喜島 1 - 1 佐保	佐保	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
第3セット	喜島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
喜島 2 - 1 佐保	佐保	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
第4セット	喜島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
喜島 3 - 1 佐保	佐保	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3

球聖の重み

『球聖戦』のタイトルが大会の歴史以上に重みを持つのは、翌年に挑戦者を迎えて防衛戦を行うシステムにある。半世紀に渡って続く『名人戦』と同様、この最終戦はロングフォーマットが採用され、そのゲームの長さはプロの大会にも類がない。

例えば球聖戦は7ゲーム先取で行われるが、東日本と西日本の代表(1位)同士が挑戦権を懸けて戦う試合(東西代表決定戦)では3セット先取り。さらに球聖位決定戦(対現球聖)では5セット先取り、つまり7先を最長で9回行うことになる。無論、それまでの幾週にも及ぶ遠い道程もその重みを増幅させている。

今年の東日本からは沖繩出身で現在は埼玉を拠点に活動する喜島安広、西日本からは大阪の佐保功一がそれぞれ激戦を制して代表となった。4月24日の土曜日。東大阪市の『高井田ビリヤード』に正装をまとった2人の選手と、応援幕を手にした応援団が来場。球聖への挑戦権を巡って激しい火花を散らした。

共に高い攻撃力を備え、リズムカルなプレーが持ち味だけに、ブレイクが当たればどちらも一気に走る力を有する。それがゆえに襲いかかる緊張と闘いながら、静かにテーブルの上のボールを狙う両選手。彼らを支えるのは何よりも応援団の声援だ。

地元の佐保には日頃からライバルとして競い合う仲間や、所属店のオーナーで

※上記ランニングスコア中、○はマスワリ、★はブレイクエース、○はその他のポイントを表しています



Mini Interview with Yasuhiro Kijima

僕には日本一の仲間がいる。 来年また一緒に笑い合いたい。

——球聖位獲得おめでとうございます。

「ありがとうございます」

——球聖になられた感想を。

「とにかく疲れました(笑)。2年前に沖縄から埼玉に出てきて、やっと結果が出せたので良かったです。でも今回の結果に満足せず、これからも精進していきたいと思います」

——代表になってからの1ヶ月間はどのように？

「普通に過ごす事を心がけました。普通ではいられませんでしたけど(笑)。練習は日頃と変わらなかったです。元球聖の青柳(高士)さんが練習相手になってくれたり、周りにはすごく支えられました」

——結果、大阪の選手2名を下して新球聖に。両選手の情報などは？

「佐保さんはシュート力と勢いがすごいと聞いていたので、走られたら厳しいな、と思っていました。村上さんはもちろんずっと以前から知っています。僕がビリヤードを始めた時から、すでにトップアマとして活躍されていた人です」

——佐保選手に勝ち、翌日の決戦を控えた時間はどのように？

「仲間と楽しく過ごして、次の日のことは考えないように。その時点で考えてしまっているんでしょ(笑)。ホテルの部屋に戻ってからは緊張で眠れませんでした」

——決定戦では1-3までリードを許しました。その時の心境は？

「あまり変化はなく、意外に落ち着いて地に足はついた状況でした。ただ、ミスが多かったので、少なくしたいとは思っていましたが……。あのまま負けたら後悔しますからね」

——そして第5セットはスタートからマスワリ5連発。ここが分岐点に？

「それ以降の流れが良かったので、やっぱりそうだったと思います。ただ、攻められる球だったから攻めただけで、連発などは意識していませんでした。そして、結果はラッキーです」

——しかし堂々のビッグタイトル奪取です。

「球聖位は日本一のタイトルだと思いますけど、僕自身が日本一だとは思っていません。でも、僕には日本一の仲間がいます。応援も声援も本当に心強かったですし、メールやブログで励ましてくれた人、全ての人からパワーをもらいました」

——ゲームボールに向かう時はどんな気持ちでしたか？

「少し遠くポジションしてしまったので不安でしたが……。ポケットできて良かったです。その後は何かを叫んで仲間の所へ行きましたが、あんまり覚えていません(笑)」

——(笑)さて、来年の防衛に向けて一言お願いします。

「今度は挑戦者を待つ形にはなりますが、『勝ち上がった方に挑戦できる席を頂いた』、そんな気持ちです。そして今までサポートしてくれた方々に少しでも恩返しできるよう、プレイヤーとしても人間としても成長していきたいです。その結果、また皆さんと一緒に笑い合えたらいいなと思います」

話が少し逸れたが、メンタルスポーツは精神的なアドバイザーの存在が大きいく、その点で喜鳥は最高のコーチを味方に付けたと言える。現にこの東西代表決定戦においても、結果として勝敗につながったのかもしれない。セットの合間には青柳の手短な助言に耳を傾け「いつも通り」のスタイルを貫いた喜鳥が、佐保がベースを掴みきる前に、セットカウン3-1でゲームを決めた。

新球聖誕生

翌25日も大阪は快晴。挑む喜鳥も迎え撃つ村上も、揃って落ち着いた表情が印象的。序盤からアグレッシブにボールを沈める喜鳥がゲームの序盤でリードを奪うが、冷静なプレーで村上が逆転するという展開でセットカウント2-0。やはり球聖位として過ごした1年は、トップアマとして名を馳せてきた村上をもさら

に成長させたようだ。現にその安定感に『村上優勢』のムードを感じた人は多い。「奇数のセットが大事なので、次セットは一つ目のポイント」と青柳が示唆した第3セットは、喜鳥がマスワリ3連発スタートから計5発を見舞う猛攻を披露し7-1の圧勝でセットを一つ返した。こうして喜鳥サイドは最初のヤマ場を乗り越えたが、そんな状況にも焦ることなく村上が再びテーブルを主導。3度目

の同スコア(7-4)でセットを奪い、3-1と再び差を広げた。村上はあと2セットで防衛、一方の喜鳥は4セット取らねばならない。

迎える第5セットが最大の勝負所なることは誰の目にも明らか。そんな状況で青柳は喜鳥に「さっき(第4セット)の積極的なミスは問題なく、むしろOKだ。ブレイクは抑えていこう」とアドバイスを送る。つまり、セコンドサイドは落としたセットに合格点を付けていた。

そしてブレイクが噛み合い始めた第5セットは、喜鳥が5連続マスワリを決め、完封勝利で後半戦へとつなぐと、さらに7-5、7-5と接戦を制して、大逆点で球聖に王手をかけた。

こうして第8セットは喜鳥が取ればゲームセット、村上が取ればフルセットで最終試合へ突入という状況に。村上が取れば流れるにも経験値を考慮しても、再び「村上優勢」が十分に予想できる。

しかし重圧がより大きくなったのは村上だったのだろうか。大事な中盤でマスワリを絡めて喜鳥が逆転を果たすと、終盤に入っても喜鳥はチャンスを実に得点につなげ、第10ゲームで迎えた難しい②をカットで決め、湧き上がる拍手に後押しされながら綺麗に取り切った。

こうして喜鳥が球聖位に就いて、第19期球聖戦は幕を下ろした。振り返れば、セコンドの青柳と、青柳が球聖戦を戦った際に磨かれた応援力を発揮した、いわば埼玉勢全員が一丸となって引き寄せたタイトルだと感じさせる一戦であった。